



オホーツク国際理解教育研究大会 常呂大会を振り返って

オホーツク国際理解教育研究会 会長 吉田 寛



第24回目を迎えた管内国際理解教育研究大会が、常呂小学校を会場に開催されました。公開授業は常呂小学校の有路先生による、セネガルにおける体験を教材化したものです。また、「プラスワンで子どもが変わる～小学校外国語活動のアイデア集」と題してFLA-Pのメンバーによるワークショップが開催されました。



有路先生の「セネガルだよ、全員集合！」では、ダカールでの子どもたちの様子を写した白黒の写真から、セネガルの生活の様子を想像し、日本との違いや同じところを考える学習を進めました。そして、ダカールの子どもの表情から、「遊び」を導き出します。

授業の根底には、有路先生の人生観や文明観が流れていて、授業そのものの「ねらい」は、小学3年生にはやや深すぎるのではないかと心配しました。しかし、子どもたちは、学習経験が積まれているのか、異文化への理解力が高く、セネガルでも日本でも、同じ「子ども」としての理解

ができたようです。「遊び」を通して「友だち」になれる、「遊び」を通して「笑顔」になれる…それを見つける授業でした。

外国語活動ではない国際理解教育の授業、有路先生の人柄と経験が、子どもたちに深く伝わっていることを感じた授業でした。

FLA-Pによるワークショップも好評でした。もっと時間があればいいなあ…そんな思いでした。現場で、困っている先生は多いと思います。少しでも、FLA-Pの活動が、現場に浸透していけばいいと思っています。先日の研修会でも、FLA-Pの活動を拡大していくことが確認されています。今後の活動に期待したいと思います。



平成23年度 オホーツク国際理解研究会総会、懇親会の模様



去る2月25日（土）に、今年度の本研究会総会と懇親会が行われました。

総会では、今年度の各部の活動内容を反省し、新年度に向けての活動計画が提案されました。

懇親会では、今年度限りにご勇退される先生を囲み、楽しい時間を過ごさせていただきました。今年度でご勇退になられるのは高柳修先生と国兼



秀也先生です。お二人にはとてもお世話になり、そしてたくさんのお話を教えていただきました。これまで本研究会に多大な貢献をいただいたことに感謝いたします。お疲れ様でした。ありがとうございました。

国際理解研究会研究部総括

研究部長 美幌町立美幌小学校教諭 相馬 一之

1 はじめに

平成20年度以降、2年間に渡り、オホーツク国際理解教育研究部は外国語活動プロジェクトチームであるFLAPを中心に活動をしてきた。平成23年度は、開発教育を中心とした研究となったが、この2年間、外国語活動を中心に取り組んできた先生方が多く、開発教育を初めから考え直さなければならなかった。そこで、平成22年度にJICA海外研修でアフリカのセネガルに派遣され、開発教育の勉強を行ってきた有路直人先生を中心に研修を進めてきた。

2 内容

○研究主題と仮説

「自分と地球をつなぎ、未来を切り拓く児童・生徒の育成」

・仮説1

身近な物事から地球的視点でとらえ、自分に何ができるかを考えることによって、世界と自分とのつながりに気づくことで地球的市民として共に関わるができるだろう。

・仮説2

言葉の学び（外国語活動）を通し、互いに尊重する態度を育てることで、進んでコミュニケーションを図ろうとする子どもが育つだろう。

○研究の視点

・視点1

身近な素材をもとにした、子どもと世界とのつながりが実感できる教材の工夫。

子どもと世界を結ぶ学習から、未来につながる行動の選択を促す授業づくり。

・視点2

コミュニケーション能力の基礎を育む指導法の工夫。

外国語活動を通した、世界とつながる意欲を高める教材の開発。

※上記の内容については、北海道国際理解教育研究協議会第9次、第10次研究に並行した研究として取り組んできた。

が、何か物足りないと感じていた。自分が平成20年に国際交流の授業をしたときに、感じたことは、世界に目を向けさせた子どもたちは、

①どのような行動を促せばいいのだろうか。

②行動をするための具体的な内容がわからない。

③国際交流は「文化理解」なのか「文化交流」なのか「多文化共生」なのか。

④授業の内容と発達段階は適切なのか。

⑤「知・理」「技能」「関・意・態」などの評価ができない。

ということで、今年度整理をしようと考えた。結構大がかりな内容なので、2年くらいで完成させるつもりであった。しかし、「今年中に～」と雲の上から声が…。

○領域の整理

学習領域は大きく分けて、「多文化社会」「グローバル社会」「地球的課題」「未来への選択」とし、オホーツク国際理解教育として学習できるキーワードを小学校低・中・高や中学校に振り分け大きな骨格を作った。

○目標の設定

「知識・理解目標」「技能目標」「関心・意欲・態度目標」を設定し、自分が行う授業がどの目標になるのか、目標の内容から、児童・生徒にどんな力をつけさせたいのかをわかりやすくした。

詳しい内容は、別紙参照してください。

3 次年度の方向性

○教科書の内容から

①「いつでも、どこでも、だれでもできる国際理解教育」というキャッチフレーズを実践したい。

小学校や中学校のどの教科書からも国際理解教育に触れられる単元を絞り出し、今年度作成した国際理解教育の領域に入れたい。

②教科書の内容で授業をする。

○新学習指導要領を意識した国際理解教育の授業の展開

学習の基礎・基本の確実な習得によって得た言葉や内容をつかひながら言語活動を進めたい。

今まで仮説2は、どちらかと言うと外国語活動を意識したものであるが、どの教科書においても児童生徒が仲間とコミュニケーションをとるために、言語活動を展開するような学習内容にしたい。

非常に難しいものとなるが、研究を重ねながら行動ができる児童・生徒をめざしていきたい。

海外への道

～面接③ 文部科学省編～

北海道面接に合格すると、7月の下旬にいよいよ最終関門の文部科学省面接があります。ここを突破すると、いよいよ希望していた海外が見えてくるのですから、緊張感も高まります。

前日に飛行機で東京入りし、新橋近辺で前泊です。前泊と言っても神宮球場や東京ドームにナイターを見に行く心の余裕などはありません。ずっと最終関門に向けての一人学習会です。前日なのにもうすでに緊張感で疲れてしまうほどです。

いよいよ当日。虎ノ門文部科学省の入口では、ガードマンに身分証明書の提示を求められます。さすが文科省。夏季休業中ということもあってか、文部科学省の中は、とても静かで仕事をしている気配も感じられないほど。どの部屋もドアが閉じられており、廊下にはきれいに絨毯が敷かれておりました。待合室に行くと、すでに6人くらいの受験者が待っていました。どうやら今日は、東日本（愛知以北）の先生方72名の面接日だったようです。同じように大阪と博多でも面接が行われているようでした。「北海道でもやってくれればいいのに…」と思いながらも、静かに自分の番が来るのを待ちました。

待合室は四階、面接は二階（二部屋）でした。いよいよ自分の番。案内して下さる係の方について、セミの声と街のデモ行進のシュプレヒコールしか聞こえない廊下を抜けて、部屋へ向かいます。「いよいよだな」と思いながら、いざ面接。面接官は三人。緊張はマックス。ですが、面接をしているうちに、不思議に気持ちが軽くなりました。質問もそんなに意地悪なものもなかったので、リラックスして終えることができました。時間にして15分もなかったような気がします。終わった後の開放感(^o^)。もう面接もないっ。帰りの飛行機はとても楽しいです。

そして結果がわかるのは、即派遣ならその年の12月、登録ならさらに待って翌年の2月です。不合格の知らせでも、やはり2月まで待つことになります。じっと待ちましょう。きっといい結果が待っています。そして、派遣登録者となると在任地（国・学校）が決まるのは、さらに年末の12月まで待つことになります。これが実に長く、もやもやする日々です。何もできませんので、とりあえず体を大切にしながら、英会話をマスターしておくことをオススメします。ご家族と「どこだろうね？」と夢を膨らませつつ、日々を過ごしてください。このコラムを読んで、海外派遣に少しでも興味をもってくれたら嬉しいです。あなたの職場は世界中にありますから。(^o^)J

編集後記

いつの間にか年度末の業務に追われる3月になりました。みなさんお忙しい毎日をお送りのことと思います。広報3号、ようやく発行となりました。遅くなりまして誠に申し訳ありません。平成24年度もぜひオホーツク国際理解研究会をよろしく願いいたします。ホームページはこちら。<http://abakoku.jp/> 文責 情報部部长 北見相内小 長崎 祐紀

（おねがい）会費の納入はお済みでしょうか？3,000円です。

お問い合わせは・・・ 端野中学校小野寺哲浩教頭先生（TEL0157-56-2023）へ。